# なのはの役目を奪ってしまった転生者

のうち

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

リリカルなのはの世界に限りなく似たパラレルワールドに転生した主人公、香川英里、彼女はある出来事をきっかけに本来、高町なのはが魔法に出会う出来事をなのはの代わりに体験することになるのだった。

# 目次


転生 ―― 1
運命の夜その1 ―― 4
運命の夜2 ―― 7
魔法の呪文はプログラミング ―― 11
大樹降誕 ―― 14
ライバル登場 ―― 20
高町家につられてぶらり温泉旅 ―― 25
理解では出来るが納得出来ない ―― 32
三人目の魔法使い ―― 37

# 転生

私はリリカルなのはの世界に程よく似た世界に転生した。私の住んでいる町は海鳴だし、翠屋はちゃんと存在し、月村家やバニングス家は存在している。私は一体どうしてしまったんだろうか、だが私の小学校はなのは達の小学校とは違う普通の公立の小学校である。

前世の私はいわゆるマッドだった。自分の大学卒業後はなんとなくの気持ちで研究を続けたくなり、大学の准教授になって研究を続け、様々なプログラムや発明をしたと思う。それに私がこだわったのはＡＩの研究だった。ＡＩ研究をする上で人に近づけていこうと私は何年も研究を続けたが、結果私はその研究の半ばで過労死してしまった。

そして私をこの世界に転生した。私はこの世界は研究の合間に見ていたアニメの１つ、リリカルなのはの世界であることに気がつく。

だがしかし、この世界には私の知るリリカルなのはの世界とは決定的に違うものがある。それは高町なのはの存在である。いや事実、高町なのははこの世界にも存在していたが今はいない。

さて、高町なのはの話はとりあえずここまでにして、一旦私の説明に戻ろうか、私は香川英里、時空管理局一等空尉をさせてもらっている技術開発局、魔導技術試験部隊隊長である。デバイスはレイジングハートである。これから話すのは私が時空管理局に入局するまでの物語である。

私は当時５歳の時に前世の記憶を取り戻した。そして私はこの世界での５年間の記憶を思い出す。

なのは「英里ちゃん、一緒に行こうなの！」

英里「待ってなのは、そんなに急いだら危ないだろ」

とこのように私と高町なのはは幼馴染だったのだ。だがある時、高町士郎さん、なのはのお父さんが重傷をおって意識不明の状態、高町家はそのことから、家でもあまりなのはを構えなくなってしまっており、寂しい思いをしていた。私はそれを解決するために一緒に桃子さん達に話そうと一緒に翠屋に向かう筈だったんだ。あれは私の不注意だった。翠屋に帰る途中、なのはと私は交通事故にあってしまったのだ。

そしてその交通事故で私だけが生き残ってしまった。私は子供ながらに申し訳ない気持ちと幼馴染が死んでしまったことに涙し、三日三晩泣き続けた。そして私はある結論に至った。またなのはに会いたい、そして私は前世からの夢、ＡＩの研究にのめり込

むことになるのだった。

そしてそれから四年と少し、私は本来はなのはが辿るであろう道のりの最初の一歩を体験することになるのだった。

# 運命の夜その１

なのはが亡くなってから四年、私はあれから、士郎さんや桃子さん達に謝り続け、あれだけ大好きだった翠屋に行くこともなくなっていた。

私が小学校３年生になった四月のある日、私はとある夢を見ていた。１人の男の子が何か訳のわからない化け物と戦っている夢を

「馬鹿な、あれは恐らくユーノだと思うが、何故私がその夢を見るんだ？、未来は恐らくちょっとしたことで変わる。なのはがいなくなったことによるタイムパラドックスが起きたのか？、なのはの役目が私に移ったということなのだろうか？」

「考えても仕方ない。とりあえずどうにかするしかないか」

『英里ちゃん、大事？』と私に話しかけてくるのは私がこの四年の中で親から買ってもらったパソコンを使い、１からＡＩプログラムを組み立て、なのはの音声データと性格をプログラミングしてつくったサポートＡＩ、ＮＡＮＯＨＡ．ｖｅｒ７、通称ノア

「ああ、大丈夫さノア、学校に行ってくるから留守の間、セキュリティーを万全に

頼む。」

『わかったの、行ってらっしゃい！』

「ああ、行ってきます。」

そして私は学校にいき、その帰り、助けてという念話が頭の中に響く。

そして声のした方向に足を運んでみると案の定、傷ついたフェレットが横たわっていた。

「・・・・、やはりここにいたか。さてさて、ここに放っておくの気がひけるし、とりあえず、この場合は人間か、動物病院どっちに行けばいいんだろうか？」

「とりあえずはここを離れるのが先決かな」

と一旦、そのフェレットを鞄に入れて家に帰ることにした。

そして家に帰ると事情を帰ってきていた母親に話し、フェレットを家で飼うことに了承をもらってとりあえずは2人で動物病院に行くことにした。そしてフェレットはとりあえず1日、動物病院に入院となり、家に帰ることに、家につくと母親はもう仕事に戻らねばならないと、荷物を準備して空港に向かってしまい私はまた1人になってしまった。自分の部屋に入る。

『英里ちゃん、おかえりなの』

「ああ、ただいま、ノア」
『どうしたの？、元気ないの？』
「そうだな。母さんがまた仕事に行ってしまったのが存外さみしいと感じているみたいだ。」
『私がいるから、英里ちゃんは寂しくないなの』
「そうだったな。ありがとうノア」
さてさてそれから４時間後、私の頭の中に念話が聞こえてくる。
「さて来たか」
『英里ちゃん、何処行くの？』
「大丈夫さ、ノアすぐに帰ってくるから」
『わかったの、行ってらっしゃい』とノアは返してくる。
ノアを作ってからもう２年近くになるが随分と人間くさくなったもんだ。
私は声に導かれるまま、動物病院へ向かうのだった。

# 運命の夜2

念話が聞こえてから私は急いで昼間の動物病院に向かうが

「やはり、ここは壊れているなさて、何処らへんかな、・・・をいたいた。」と私は黒い化け物から逃げ回るフェレットを見つけた。

こちらに向かってきたフェレットを抱き上げると

「大丈夫かい?」

「ここは危険、早く逃げてください!」

やはり前知識で知っていても動物が人の言葉を話すのを間近で観るとびっくりするな。

「ふむ、フェレットが喋るなんて実に興味深いな。」

「今はそんなことを言っている場合じゃありません。貴女は僕の念話をキャッチして来てくれた方ですか?」

「ああ、あれか、今から寝ようとする時に聞こえたもんだから」

「それより、今はこの状態を打開するためにこれに触って僕の言う通りに呪文を唱えてください。」

「・・・・、よくわからないがわかった。」

「風は空に」

「風は空に」

「星は天に」

「星は天に」

「不屈の魂を胸に！」

「不屈の魂を胸に！」

「この手に魔法を！」

「この手に魔法を！」

「レイジングハート！、セットアップ！」

「レイジングハート！、セットアップ！」

と私の服装を変える。私の服はピンク色の光とともに黒いハイネックのセーターをアンダーに下はジーンズ、そして白衣を羽織っており、丸眼鏡をかけた、前世の私の服装に変わっていた。そしてレイジングハートはなのはのように杖の形ではなくグローブ型である。

「おお、久しぶりに来たなこの服」

『貴女のイメージする動きやすい服装を再現してみました。』

「そうか、ありがとう、君はレイジングハートでいいのかな？」

『よろしくお願いします。マイマスター』

「さて、それじゃ、いくか、レイジングハート私に今何が出来るのかな？」

『まずは、アクセルシューターを』

「了解、よしアクセルシューター」と言うと私の手の平に魔力弾を生成し、それがレーザーとなって幾重にも枝分かれして発射されていく。

「なるほど、魔力弾の生成はこうするのか」と私はここであることを試してみたくなった。攻撃を避けながら、レイジングハートに術式の構築式を見せてもらい私はそれを感覚でいじって発動させてみた。するとそれには当たった瞬間に相手を拘束する効果があることがわかった。

「ふん、なるほどここをいじるとそうなるのか、色々と試してみたい所ではあるが今日はここら辺でお終いにしようか。そこのフェレット君、あとはどうすればいいのかな。」

「あ、はい、えとシーリングモードを起動してそれを封印して

「わかった。レイジングハート、シーリングモードだ。」
『シーリングモード起動』
「ジュエルシード封印」と化け物は青い菱形の石に変わった。
「さて、フェレットくん、とりあえずこの場は引くぞ。」
「あ、はい」とそして私はユーノを連れて家に帰るのだった。

ください。」

# 魔法の呪文はプログラミング

ユーノを家に連れて帰り、その翌日私は学校でユーノと念話で今回の事件についての経緯を聞いている。

『・・・・・・というわけなんだ。』

『そうか、それで君はあんなところにいたのか。それで然るべきところに連絡は行ったのだろうな?』

『うん、でもここまで時間がかかるみたい。』

うん、やはりここまで聞いてみて思うがこのジュエルシードを単独で集めようとするのはかなり無茶だったんだなと思う。

『なんだ、とりあえず、レイジングハートは私が持って来てはいるが良かったのか?』

『うん、僕が持つより英里が持ってくれた方が役立つと思うから』

『まあ、わかった』

それから4時間あまり、あたりすっかり赤くなり夕方、ユーノから念話で呼び出され、神社に現れた犬の化け物を退治し、取り憑いていたジュエルシードを封印した後、自室にて魔法式の書き換えての魔法の実験を行っていた。

「・・・・なるほど、ここの構築式をいじるとこうなるのか。」

「英里、すごいね。普通この歳でそこまで魔法の構築なんてやる人はほとんどいないのに」

『英里ちゃんはすごく頭がいいの！、７歳の時に私をパソコンを組んで私のＡＩシステムを構築したんだよ。』とノアが私の経歴を答える。

『マスターは天才なのですね。』

「私はそんな天才なんていう部類の人種じゃないさ、確かめたいことを何回も試しただけさ。天才っていうのは興味のないことでも高い成績を打ち出す奴のことさ。」

「それでも英里はすごいと僕は思うよ。」

「ふふ、そうか、そんな風に言われると私としては嬉しい限りだけどな。」

そんなことをＡＩも合わせた4人で話し合いで穏やかな夜を過ごし

たのだった。

そして翌日の夜、原作でなのはの通う聖洋小からジュエルシードの反応があるらしく、結界を張って侵入して、ジュエルシードの暴走体と戦うことになった。

「全く、ジュエルシードがこんな非科学的なオカルトチックな見た目の暴走体になるとは、はあ、怖いわかではないが、ここまで露骨だと逆に怖くないな。レイジングハート、試作術式のテスト行こうか、シーリングバインド！」

『シーリングバインド、発動します。』ジュエルシードの暴走体をチェーンバインドが拘束すると暴走体は封印され、ジュエルシードに戻った。そう、これはレイジングハートのシーリングモードの術式をチェーンバインドに組み込んだものだ

「んー、通常のシーリングモードを行なった場合より若干封印するまでの時間が長いな。これはまだまだ改良の余地があるかな。」

と今回の術式の反省点を考えながら私は家に帰るのだった。

# 大樹降誕

ユーノやノア、レイジングハートと共にジュエルシードの捜索を行いながら、術式の構築の研究を繰り返していた。

「やはり、このディバインバスターとかいう砲撃魔法の術式のプロトコロルはもう少し、簡略出来ないか？」

「無理だよ、英里、砲撃魔法は強力な分消費する魔力も術式の制御も繊細なものだから使い手自体があまりいないんだよ。」

『マスターの魔力量がいかに多くとも砲撃魔法というのは諸刃の剣なのです』

『まあ、ゆっくりやっていこうなの。英里ちゃん、ＣＧシュミレーターでさっき英里ちゃんがしてたオーダー通りの術式構築のシュミレートをしてみたんだけど、見る？』

「ああ、見せてくれ、画面に出してくれるかな。ノア」

『うん、わかったの』

そしてノアが算出した、シュミレーターの動画が再生される。

すると発射前に魔力が暴走を起こして、デバイスが自壊し、さらに爆発を起こしてしまった。当然、調整を誤った私も死んでいるようなものだ。非殺傷設定だとしてもだ。出力と術式構築の一部簡略化をするべくいじったら見事に失敗してしまった。

「あらら、これはこれは、やっぱさっきの案は無しだ。さて気分転換に散歩にでも出かけようか、ノアも今日は携帯電話に入ってもいいぞ。」

『ええ、いいの!?』

「ああ、ここ最近いけてなかったろ。いつもみたいに2人きりとは行かなくなったが、散歩に行こうか。」

『英里ちゃんと2人がいいけど、それはまた今度ね。』

「英里とノアは仲良しなんだね。さて、それじゃ、ジュエルシード探しも兼ねて散歩に行こうか。」

そして私達は家を出て、海鳴の街を歩いた。そして私が歩いているとある河川敷のサッカーグラウンドで試合が行われていた。だがちょうど終わる頃らしい

「・・・、あれは」

「どうしたの英里?」

少し、様子を見ていると視線を感じたのか、地球産戦闘民族高町家の大黒柱、高町士

郎と目があってしまった。まずい

「いや、なんでもない。行こうか」

と私が歩き出すと誰かにぶつかった。

「やあ、英里ちゃん、そんなに急いでどこ行くんだい？」

と私がぶつかったのは高町士郎さんだった。相変わらず超人じみている。ここからさっきの場所までゆうに１００メートルはあったというのにこの人はあっという間に私の前に現れる。

「いや、士郎さん、私は・・・・」

「せっかくあったんだ。家でご飯食べて行かないか？、お母さん、いないのは知ってるし、昔はよく家に食べに来てたろ。」

「私は、逃げているだけかも知れませんがもう私は士郎さん達と関わるべきではないんです。士郎さん達もまだ幼かった私を攻めはしなかった、だけど心のなかでは思ったはずです。何故、生き残ったのがなのはじゃないんだってね。私だってそう思った。なんで」

「いいから、さ、ももこやみゆきもきょうやも会いたがってる。」と強引に私は士郎さんに翠屋に連れてこられてしまった。

「桃子、ただいま。」

「あら、士郎さん、お帰り、あら、あなた、英里ちゃん、大きくなったわね。」

「桃子さん、わたしは」

「英里ちゃんが、毎年の欠かさずに、毎年どころか毎月のなのはのお墓にお参りしているのは知ってたわ。今日はご飯食べに来てくれたんでしょう、久々に来てくれたから、今日はサービスで奢っちゃうわ。」

と桃子さんは厨房に戻っていった。

はそして私はかつて母さんがいない時、なのはと一緒に食べていた席に案内される。

料理が来るのを待ちながら桃子さん達とどう話したらいいのかを考えているとユーノの念話が入る。

『英里、ジュエルシードだ。急いで来て!』

『こんな時にか、えぇい、仕方ない。いま行く。』と私は急いで翠屋を出るのだった。

そして英里が翠屋を出てしばらく、桃子が料理を持ってきた。

「英里ちゃん、おまたせ、ってあら?」

視点は英里に戻る。

「まったく桃子さんの料理は食いそびれるし、なんて日なんだ今日は、さてユーノ、私のランチタイムを邪魔した空気の読めない奴はどこ、いや、もう見えてるからいいや。」

「英里、暴走体は今までにないタイプだから気をつけて、人間がジュエルシードを発動させた時が一番、ジュエルシードは強い力を発揮するんだ。」

「あの木の化け物は人からできた可能性があるってことか。」

「つまりはそういうことだね。」

「そうか、さてさっさと済ませようか。レイジングハート」

「オーケー、バリアジャケット展開します。」

私はいつもの格好に変身する。

「さて、ああいう敵は基本的に核を破壊しないと際限なく再生するから厄介なんだよな。」

「英里、僕もなるべくサポートするから攻撃は頼んだよ。」

「わかった。」私は空を飛ぶ。

「さて、ここから、私は何が出来るかな。とそうだ。レイジングハート、ノア」

『何?、英里ちゃん?』

「これからエリアサーチで本体を探す。その時、術式の演算処理を頼むぞ。あれは確実に一発で破壊しなければな。ユーノ、お前は私の護衛を頼むぞ。」

「わかった。」

と私達はあの化け物の攻撃を避けながら会話をする。

「エリアサーチ」、本体の居場所を特定に成功し、ノアがレイジングハートと一緒に封印砲の威力をあの木を一瞬で封印できるものに調整してくれている。魔力制御なんかもレイジングハート達と同じく。外部バイパスを繋いで威力を挙げた分、ＡＩにも不可がかかるし。最悪壊れてしまうかもしれない、これは２人の為にも早く終わらせねば

そして私はエネルギーチャージが終わり、ジュエルシードの暴走体の木の化け物を一瞬で粉々にしてジュエルシードを封印した。そして変身を解いて、結界を解く。

「結界って意外と便利なのな。ユーノ今度教えてくれ。」

「うん、それは構わないよ。」

と私は家に帰るのだった。はて、何か忘れているような?

# ライバル登場

先日の大樹の件から、数日、私はいつもと同じく、パソコンのディスプレイとにらめっこをしていた。

「ふぅー、ここはこれでいいかな。ノア、シュミレート頼む。」

『はぁーい、わかったの』と今回の術式の構築計算式のシュミレートを開始する。今回はうまくいったらしい。

「中々上手くいったんじゃないか？」

『うん、だけど今回構築出来た構築式だと、どうしてもレイジングハートの容量を超えちゃうかもしれないの。』

『ＹＥＳ、一回の戦闘でそう何度も使えませんし、この術式の外部の魔力を束ねて発射するのも制御はとても繊細です。マスターと一緒に行ってもそう何度も使えません。』

「でも英里はすごいね。この歳でブレイカーの術式を単独で組んじゃうなんて」

「ブレイカー？」

「ブレイカーっていうのは、英里が今、やろうとしていたことのミッドチルダでの名称のことだよ。」

「なんだ、既に確率された技術なのか。」と英里はガクッと肩を落としてしまった。

「でも、僕も確認したけどこのブレイカーの構築式は本当に完璧だと思うよ。」

「いいか、ユーノ。技術者にとって完成や完璧っていうのは絶望にた感情を持つものだ。何処かの科学者はいった。つねに高みを目指せ、されど完璧になるなかれってな。」

「時々、英里が子どもに見えなくなる時があるよ。」

「よく言われるよ。さてそれじゃ容量が足りないなら出来る範囲でレイジングハートを強化改造していくつもりだ。レイジングハート構わないか?」

『ＹＥＳ、マスターのお役に立てるなら、是非』

「ありがとう、レイジングハート、さて設計図を描いていこうか。」と私は改良の前に私に出来る範囲での地球産の魔法デバイス、劣化版レイジングハートの製作を行うことにした。インテリジェンスデバイスというらしいレイジングハートのようなデバイス、私が設計図を引いたのはレイジングハートと合体させることによって出力

を底上げする拡張パーツ、それ自体をもう一つのインテリジェンスデバイスとすることでさらに出力強化、魔力制御や術式発動の処理能力を向上させるという感じの構想をユーノに話して聞かせながら、作業をする。ユーノは英里の邪魔になってはとジュエルシードの探索に向かうのだった。

それから2時間、英里が設計をしながら並列でノアのシュミレートに沿って修正を加えていく。その際にレイジングハートにも意見を聞きながらさらに作業をしていると

（英里、英里!、大変だよ。ジュエルシードが暴走した。）

「ん、そうかわかった。すぐに向かう。」

と英里はレイジングハートを持ってバリアジャケットを装着し、現場に向かうのだった。

そして魔力反応の出ている場所にたどり着くと巨大な猫がいた。

「あれは、月村邸か?、そうか。もうそんな時期か」

『マスター?』『英里ちゃん?』

「いや、なんでもない。行くぞ。」と私は結界を念の為結界を展開して猫をどうにかするか考えていると何処からか光刃が飛んできて猫に直撃、さらに次の瞬間、金髪の少女が鎌の形状のビーム刃を出したデバイスで攻撃し、猫のジュエルシードを封印する。

「すごいな。あの子だがジュエルシードを持っていかれるのも面白くないな。」と私はその金髪の少女に攻撃する。

「誰?、地球に魔導師!?、ジュエルシードの回収者」

「すまないが、それを持っていかれると私としては少々面倒なんだ。それを渡してはもらえないかな?」

「それは出来ない。これを母さんが必要としてるから」

「交渉決裂か、仕方ない。ここからは少々荒っぽく行かせてもらう。」と英里は魔力を拳に纏わせて殴りかかる。

「嘘、最初からそのつもりだったくせに!」

「そんな訳はないだろ。何事も争わないで済むならそれが一番だ。」

「しつこい」と金髪の少女は光を発して英里の目をくらませる。

「逃げられたか・・・・、あれがフェイト・テスタロッサか」

24　ライバル登場

# 高町家につられてぶらり温泉旅

先日の金髪の少女魔導師、フェイトとの邂逅から2日程、世間はすっかりゴールデンウィーク、英里は士郎達、高町家に連れられて私は地元でも有名な温泉街へとやってきました。

「英里ちゃん、楽しんでるかい？」

「士郎さん、良かったんですか？、私やましてやペットのユーノまで」

「ああ、君のことは君のお母さんからお願いされているからね。それに恭弥の彼女の家族も一緒に行くことになっててね。そこの家の妹ちゃんが君と同い年なんだよ。仲良くしてもあげてくれないかな？」

「まあ、士郎さんがいうなら」

と英里は考える。

（この状況で恭弥さんの彼女ってことは月村しのぶ、ということはまさか）

と出発前に英里はその子、恐らくは

「あの、私、月村すずかです。よろしくお願いします。」

「ああ、私は英里、香川英里、よろしく。」と英里達は車に乗り、目

的地である旅館へと向かうのだった。旅館に向かうあいだ、私はノアのバージョンアップを車に自作のノートｐｃを持ち込んで行っていた。

「英里ちゃん、なにしてるの？」となりに座っているすずかは聞いてくる。

「ん、いや、私の開発した人口知能のバージョンアップだ。」

「人口知能⁉？」とすずかより先にすずかの姉の忍が反応する。

と道中、忍とのトークで終わってしまい、バージョンアップは旅館に入ってから行った。

そして温泉に入っていると

「英里ちゃんってすごいんだね。わたしもお姉ちゃんの真似してたまに機械いじりするくらいなのに、同じくらいの歳でもうＡＩを組んだらしてる。」

「そうかな、そんな私はやりたいことをやってただけだしな。」

「私もその歳で英里ちゃんのやってることはとってもすごいと思うわよ。」

などと楽しい入浴の時間が過ぎる。

そして温泉から上がって、旅館の通路を歩いていると赤髪のナイスバディなお姉さんがいた。

「あんたかい?、うちの子にアレしちゃってる子は?」と私を値踏みするかのように見てくる。

「なんだ、あんた。こんな小さい子どもを捕まえて失礼な奴だな。」と英里は返す。

「んー、ごめんごめん、人違いだった見たい。」と立ち去るが念話が流れ込んでくる。

(子どもはおとなしく家で遊んでなね。)

「・・・・、あいつは」と英里は今、話しかけてきた人物が誰であるかを確信し、これもまた世界の修正力であると

ところ変わって件の赤髪の女性は温泉に浸かっていた。

(アルフどうだった?)

「うん、頭はきれそうだけど、あんなのフェイトに比べたら、全然大したことないよ。」

それから時間は過ぎて夜、すずかや他の皆が寝静まる中、ユーノと英里は昼間に出会った女性のことについて話していた。

「やっぱり、あいつはこの前の金髪の魔導師の仲間なんだ。それでなんだけどね。これからは僕一人でジュエルシードを集めようと思うんだ。これ以上、英里をこん

な危ないことに巻き込みたくないんだ。」

「何を言っているんだ。ユーノ確かに私は最初こそ、ユーノを手伝うことが始まりだった。ユーノが与えてくれた魔法の力は停滞していた私の技術者としての生活に色を与えてくれた。今、私は誰かに頼られたからではなく、自分の意志でユーノ、君を手伝おうとしているのさ。」

「英里」

「さて、それじゃ、皆寝静まったところで。ここら辺でもジュエルシードがないか探索してしてみるとするか。」

と私とユーノは旅館を出て探索を開始した。

そして結構すぐに魔力反応を察知した私達は反応のある場所へと向かうと既にフェイトがジュエルシードを封印したあとだった。

「こんばんわ、お嬢さん。早速で悪いんだがその石をこちらに渡してはいただけないかな?」

「前にも言った。それは出来ない。」側にいた狼とフェイトは強制転移で私達ごと近くの森へと逃げる。

そして森の中で狼が英里を襲おうとするがそれをユーノが防ぐ。

「いい使い魔をもってる。」

「ユーノがかよしてくれ、私は彼を使い魔などと思ったことはない気の良い友人としか思ったことはないよ。」

「それで、貴女はどうしたいの？」

「前にも言ったが此処は話しあいで解決しないか？」とその言葉を言うとフェイト襲いかかってくる。私はそれを手で掴み攻撃を止める。

「言葉だけじゃ、何も伝わらないし、変わらない」

「そこに関しては私も同感だ、しかし、争わないで済むならその方がいいとは思わないかい？」

「・・・・・」とフェイトは無言でデバイスを構える。

「オーケー、わかったからそんな風に黙らないで貰えるかな、じゃあ、こうしよう、互いのジュエルシードを一つ欠けて勝負をしようじゃないか。今日はこの辺で勘弁してもらえると助かるんだがね。」

「・・・・」、コクと縦に首を振る。

「よし、それじゃやろうか。」と英里はフェイトに蹴りを入れようとするが素早く上空へ退避、それをすぐに追いかけ、攻撃を仕掛けるがガードされてしまう。またフェイトの攻撃を受けるも私が杖を手で受け止めて、デバイスごと投げ飛ばすがすぐに体制を整えられてしまう。そしてそのような戦いが進む中

「さて、レイジングハート、この前、試したやつ行ってみようか。」
『オーケー、マスター、スパイダーネット』
と魔力で出来た網がフェイトを拘束しようとするがフェイトはそれを軽々と避けてしまう。
そしてそんな中で2人は砲撃魔法を放つがその魔法同士がぶつかりあたりが見えなくなる。
そして視界をサーモセンサーに変えようとした時、一足早くサイズモードとなったデバイスを私の首の直前で停止していた。
英里は両手をあげて降参のポーズをとる。
「はは、降参だ。レイジングハート、勝者に景品を出してやってくれるかい。」
と手の甲にはまった宝玉からジュエルシードが1つ排出される。それを手に取るとフェイトは刃を首から遠ざける。英里がジュエルシードをわたすと背を向けその場を後にしようとする。
英里はフェイトが去る前に自己紹介をすることにした。
「そうだ、そう言えばなのっていなかったな。私は香川英里だ。君の名前は?」

「・・・・・、フェイト・テスタロッサ」

と名前を告げるとフェイトはその場を後にするのだった。

# 理解では出来るが納得出来ない

先日のフェイトとの戦いに完敗してしまった英里、普通なら、落ち込んだりするのだろうが英里は違った。

カタカタッ！

とキーボードを動かして術式構築のシュミレーションを繰り返していた。

「英里、そろそろ寝たほうが」

「うるさい！、今の私に寝ている暇はない！」

とユーノの制止の声を聞いても聞きはしなかった。

とそれを重く見たのか、レイジングハートとノアがパソコンをシャットダウンする。

「何をするんだ！」

『英里ちゃん、流石に休んだほうがいいの」

『ＹＥＳ、マスター、今日はもっと休んでください。』

「ん、わかったよ。休めばいいんだろう。わかったしばらく寝る。」

と英里は布団をかぶって寝た。

それから4時間ほどして、英里は翠屋に行って食事をとって家に帰ろうとした時、大きい魔力を感じた。

「・・・・・、これは」

「英里、行こう!」とユーノは結界をはる。

英里もバリアジャケットに着替え、空を飛ぶ

そして発動場所に向かうと

「・・・・・、おやおやこれはここ最近何処に行っても顔をあわせるな。フェイト嬢、いい加減運命を感じてしまうよ。」

「ジュエルシードは渡さないよ。」

そして2人の会話を邪魔するように暴走体が襲いかかるが

2人は既に起動させていた封印モードで向かってきた途端に封印されてしまった。

「さて、邪魔な奴はいなくなった。ここからは取り合うとするか」

「やろうか、英里」

と2人の戦いが始まった。お互いが攻撃を避けて、更にカウンターを仕掛けるなど、2人の戦いは更に激化する。英里はこの前の戦いにおいて格闘戦やありきたりな遠距

離攻撃だけでは勝てないと感じ、つい今朝方まで作っていた。術式を発動する。
エネルギーで出来た光輪を生成し、それに強力な回転エネルギーを与える。自動追尾型の追撃魔法
「名付けてリッパーシューター」とそれをいくつもつくって様々な方向からフェイトを狙う。それをフェイトはバルディッシュの鎌を射出し、リッパーシューターを全て撃ち落とした。英里に接近する。
「中々やるな。」とエネルギーでつくったタガー二本でフェイトの攻撃を受け止めて蹴りを入れる。それがモロにフェイトの顎に決まる
フィニッシュブローの必殺技を叩き込む。
「くらえ!、ジェットマグナム!!」左腕にスピード強化、威力強化、身体強化をかけた状態で砲撃魔法のエネルギーを全て拳に集中し、相手に叩き込む技である。
それを受けてフェイトは吹っ飛んでしまった。英里も始めて使ったこの技の反動の大きさに膝をついてしまう。
フェイトと英里の2人は立ち上がり、封印されて転がったジュエルシードを取り合おうとするがここで異変が起こる。フェイトと英里、お互いのデバイスに亀裂が入り、空間一帯を光に包む。なんと2人の闘争本能に刺激されて封印したジュエルシード

が再起動したのだ。再起動したジュエルシードに吹っ飛ばされてしまう2人、フェイトが英里より、早く立ち上がり、素手でジュエルシードを封印しようとしていた。

「フェイト、駄目だ無茶だよ。」

とアルフが止めに入るがフェイトはそれを聞かずに封印をしようとする。

とここで

「やれやれ、ずいぶんと無茶なお嬢さんだ。」

「英里！」

「エネルギーバイパスを繋げる。エネルギーリソースを半分こっちよこせ。」

「で、でも」

「いいから、早く！」

「う、うん！」とエネルギーバイパスを繋げたレイジングハートを使い、投影式のキーボードを展開して、エネルギーを相殺するべく恐ろしか早い演算処理を行う。

そして数分後、漸くジュエルシードを再封印した。

フェイトは疲労で倒れてしまったそしてそれをアルフが抱き上げる。

「今回は例を言っとくよ。ありがとう助かったよ。」とアルフはその場をさるのだった。

# 三人目の魔法使い

先日のジュエルシードの暴走から翌日、フェイトは集めたジュエルシードを持って母の待つ、時の庭園にやってきていた。

短期間のうちに四つのジュエルシードを集めたフェイトを叱ることはないと踏んでいたアルフだったが待っていた現実は待たせた挙句、四つだけとは何事かいう母親の怒りだった。　そして、外で待っていたアルフの耳に鞭のしなる音とフェイトの悲鳴が聞こえてきた。

我慢できずにアルフは駆け出していた。

部屋に突入すると部屋の真ん中で倒れている自分の主人の姿があった。急いで部屋から連れ出すアルフ、アルフはフェイトを抱き抱えながら自分の行いを悔いていた。そしてフェイトに謝る。こんなことになることを知っていたならと。

だがフェイトから出でくるのは、こんな扱いを受けた恨みつらみではなく母親に対する擁護だった。

それからアルフ達は時の庭園を後にするフェイトは母親の願いを叶える為、アルフはそんな主人を支えるために

話の視点は英里へと移る。

先の戦いで破損したレイジングハートが漸く修復が終わり、ジュエルシードの探索を行なっているとジュエルシードの反応をキャッチ、急いでセットアップして現場に向かう。ジュエルシードと公園の木が融合した姿になる。そこにフェイトもやってきて、一気に2人で封印する。そして両者は再び向かい合う。

「封印したジュエルシードに、強い刺激を与えるのはダメみたい」

「ああ、そうだな。昨夜のようになってはお互いのデバイスが可愛そうだからな。」

「だけど、ジュエルシードは譲れないから」フェイトはデバイスを構えていう。

「私は君と話し合いをしたいだけなんだが・・・・、君はそれでは納得しないらしいな。」と英里もまた、拳を構える。

「ここでフェイト、君を倒せば少しは話をしてもらえるかな。」

「・・・・・・」コクッと無言で頷く。

2人はお互いに飛びかかろうとしたその時、2人の中心に魔法陣が浮かび上が

り、そこから現れた何者かが2人の攻撃を止めていた。

「ストップだ。ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか。」

「時空管理局?」

「とりあえず、2人は武器を下げるんだ。これ以上戦闘を続けるなら!!?」と言いかけたとき、空からクロノに向かって攻撃が降り注ぐ。急いでシールドを張るクロノだったが、フェイトはその隙をついて逃げようと封印され、宙に浮いたジュエルシードを取ろうとするがそうはさせじとクロノの攻撃が直撃する。

「フェイト!」とアルフは急いでフェイトをキャッチする。

追撃しようとするがその間に英里が割って入る。

その隙をついてアルフはその場から離脱した。

その光景を見ていたもの達がいた。

「戦闘行動停止、捜索者の片方は逃走しました。」

「追跡はかけてるの?」

「多重転移をしているのか、追い切れませんよ。」

「まあ、戦闘行動は迅速に停止、ロストロギアも無事に確保したようだ

し、よしとしましょう。事情も色々と聞けそうだしね。」と画面に映るクロノに通信を入れる。

『クロノ、お疲れ様』

「すいません、片方は逃してしまいました。」

『うん、まあ大丈夫よ。それでね。ちょっと話を聞きたいからそちらの子達をアースラに連れてきてもらえる。』

「了解しました。」

クロノは英里とユーノを連れてアースラへと転移するのだった。